

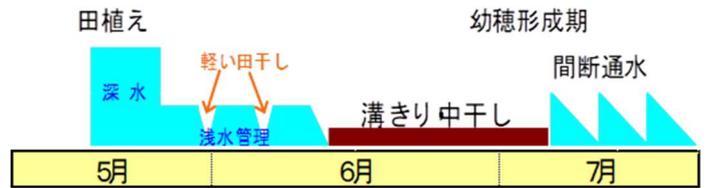
溝切り・中干しで健全な稲体を作ろう

～全てが穂になるとは限らない～

分けつは6月下旬から7月上旬頃に最も多くなりますが、すべてが穂になるとは限りません。安定した収量を確保するために無効分けつを抑制し有効茎を確保しましょう。



・6月に入る頃には、わきや藻の発生が見られるので、軽めの田干しで発生を抑制しましょう。



■溝切り

・中干しを効果的に行うため、また中干し以降の入排水管理を速やかに行うために溝切りは不可欠です。
目標茎数の7～8割(コシヒカリ移植の場合は茎数16本/株・直播の場合は茎数100本/m)が確保された時点で落水し、2.5～3m(8条～10条)間隔で溝切りを実施しましょう。



■中干し

・中干しは、土壌を還元状態から酸化状態に切り替え、ガスを除去し根の活力を高めます。
※中干しが不十分になると根張りが劣り、地耐力が不十分のまま登熟を迎え、登熟後半に稲の活力低下を招きやすくなります。



半湿田(一般的な圃場)



乾田(浅い圃場)



・半湿田(一般的な圃場)では小さなヒビが入る強めの田干しを行いましょう。ただし大きな亀裂が入らないように注意しましょう。
・乾田(浅い圃場)では足跡に水が少し入る程度まで田干しを行いましょう。



・葉色の低下を避ける為、大きなヒビが入る程一度に強く干し上げるような極端な中干しは行わないよう注意しましょう。

・日本晴は分けつが旺盛な品種で過剰分けつになりやすいため注意しましょう。過剰分けつになると幼穂形成期以降に栄養不足となり減収することが懸念されます。時期が遅れないよう中干しを実施しましょう。(20～22本/株程度)

☆肥料切れに注意！！

・平均気温が高くなると一発肥料成分の溶出が早まり肥料切れになることがあります。6月下旬を目安として中間追肥(ケイ酸加里・ミネラルPK)を施用し、加里の不足を補いましょう。



中・後期の病害・除草対策

■病害対策

・梅雨時期になると高温多湿になるため、いもち病や紋枯病にかかりやすくなります。

※移植栽培で苗箱施薬剤(ルーチンエキスパート粒剤)を使用していない場合や、直播栽培で種子処理剤(ルーチンシード FS)を使用していない場合には、6月上中旬頃にいもち病予防としてオリゼメート粒剤、7月中旬頃に紋枯病予防としてリンバー粒剤を散布しましょう。



・品名:オリゼメート粒剤

・病害:いもち病

・効果:予防

※供給が再開しました。



補植用の置き苗はいもち病が発生しやすく、葉もちの伝染源となるので、早期に圃場から除去しましょう。

・品名:リンバー粒剤

・病害:紋枯病

・効果:予防・治療



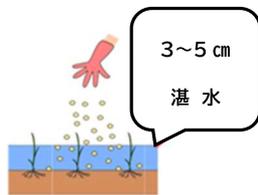
■除草対策

ノビエ対策

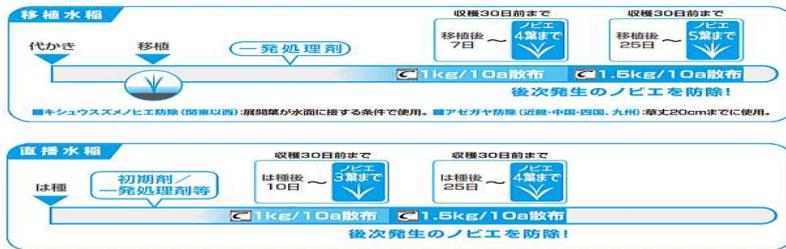
・品名:クリンチャー1キログラム粒剤

・使用量:1~1.5 kg/10a

※ただし、収穫30日前まで



・圃場内に残ったノビエやホタルイをはじめとしたイネ科雑草はカメムシを引き寄せます。斑点米を減らすためにも、しっかり除草しましょう。



広葉雑草対策

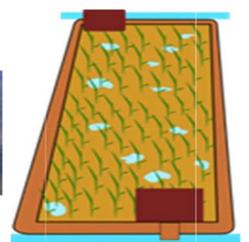
・品名:バサグラン粒剤

・使用量:3 kg/10a

※ただし、収穫60日前まで

・散布方法:落水し足あと水状態になったら水口・水尻をしっかりと止めて散布。

散布後は少なくとも3日以上は水口・水尻を止めたままにしましょう。



スポット処理も可能

ノビエ+広葉雑草対策

・品名:ゲバード1キログラム粒剤

・使用量:1 kg/10a

※ただし、収穫60日前まで

